



EMERGENCY WATCH

No. 98 Feb 2019



神戸こども初期急病センター

2019年1月
受診者数
4320人

疾患頻度

1. インフルエンザ 1393人(うちB型5名)
2. 急性上気道炎 519人
3. 感染性腸炎 343人
4. 咽頭炎 172人
5. 気管支炎 111人



- ・インフルエンザ感染者数ですが1月は爆発的大流行でした。
- ・RSウイルス感染症ですが、8月に40名を記録し、1月は10名未満です。RSウイルスの夏期の流行が目立ちます。
- ・水痘(水ぼうそう)が12月35名、1月37名とプチ流行を認めております。
- ・伝染性紅斑(りんご病)1月3名と世間で言われているとおり、プチ流行中です。ご注意下さい。



相変わらず寒い日々が続きますね。今回は、夜間救急でも診療の機会が多い、蕁麻疹についてまとめてみたいと思います。

Q1 蕁麻疹(じんましん)ってどんな病気？

蕁麻疹は皮膚の一部が突然に赤くなり盛り上がり(膨疹)、しばらくすると消えてしまう病気です。大抵は痒みを伴います。数時間以内に消えるのが普通ですが、中には1日以上続くものもあります。膨疹の大きさは1~2mm程度のものから手足全体位のものまで様々で、形もまた様々であり、大きさや形に本質的な意義はありません。

Q2 蕁麻疹がおこる仕組み

蕁麻疹は、皮膚の中の小血管が一時的に膨らみ、血液の中の血漿と呼ばれる成分(血液から白血球、赤血球などの細胞成分を除いた液体)が周囲にしみ出た状態です。皮膚の血管の周りには、マスト細胞と呼ばれる、顆粒が詰まった細胞が多数存在し、この細胞が顆粒を放出すると、血管がその成分に反応して蕁麻疹を生じます。顆粒の主たる作用物質はヒスタミンと呼ばれ、血管を拡張し血漿成分を血管外に漏出させます。またヒスタミンは痒み神経を刺激するため、蕁麻疹では痒みを伴います。

Q3 蕁麻疹の原因

蕁麻疹が起きる仕組みは大きくアレルギー性のものと、非アレルギー性のものがあります。最も良く知られているのは「即時型アレルギー」と呼ばれる反応です。マスト細胞の表面にはIgEという蛋白質が結合しており、例えば、エビ、カニ、ソバ、果物といった食物に含まれるアレルゲンがIgEを介して皮膚マスト細胞を活性化することにより起こります。一方、青魚、肉類、タケノコ、ほうれん草などの肉類、野菜類などで起こる非アレルギー性の蕁麻疹は、食品中に含まれるヒスタミン様物質が直接血管に働いたり、あるいは抗原以外にヒスタミンを遊離させやすい成分が含まれていることにより起こります。このタイプの蕁麻疹は、同じ食品を摂取しても材料により、あるいはその日の体調などにより症状が出たり出なかったりする傾向があります。アレルギー性の蕁麻疹の場合は、疑わしい食品や、その食品のエキスなどを用いた皮膚検査、または血液検査により比較的簡単に原因を突き止めることができます。一方非アレルギー性の蕁麻疹の場合は、その食品の食べ方や量、消化管からの吸収のされ方などに大きく影響を受けるため、皮膚や血液を用いた検査では原因を特定できません。また、他にはストレスもしばしば蕁麻疹を悪化させる要因となります。

Q4 蕁麻疹の治療

蕁麻疹の治療の第1は、できるだけ原因・悪化因子を探し、それらを避けることです。第2は薬による治療です。蕁麻疹はマスト細胞からの遊離ヒスタミンが血管に働くことで症状が現れます。そこでこのヒスタミンの作用を抑えるために、抗ヒスタミン薬や抗ヒスタミン作用のある抗アレルギー薬が用いられます。これらの薬を内服薬、または注射薬として用いられた場合、蕁麻疹の種類によらず効果が期待できます。外用薬は多少痒みを軽減する程度であまり効果は期待できません。この他、生活上の注意点としては、蕁麻疹の増悪因子となりやすいストレスをできるだけ溜めないようにする、魚介類や肉類はできるだけ新鮮なものをとるようにする、などがあります。

公益社団法人 日本皮膚科学会 ホームページ参照